



指揮  
Conductor  
イルジ・コウト  
Jiří Kout

1937年12月26日チェコ生まれ。プラハ音楽アカデミーで同国の名匠アンチェルに師事後、ピルゼンで本格的なキャリアをスタートさせた。65年のブザンソン指揮者コンクール、69年のブリュッセル国際指揮者コンクールで優勝し、73年にプラハ国民劇場の指揮者に就任。76年にドイツに移住(後にドイツ国籍を取得)、バイエルン州立オペラ第1指揮者、ザールラント州立劇場音楽監督、ザールラント州立管弦楽団首席指揮者を歴任。93年からベルリン・ドイツ・オペラ第1指揮者、96年からはスイスのザンクト・ガレン交響楽団首席指揮者に就任して現在に至っている。この間、ライプツィヒ・オペラ音楽総監督も兼任した。すでに30年に及ぶ練達のオペラ指揮者として国際的な評価を得る一方、コンサートでもベルリン・フィル、チェコ・フィルを筆頭に、ヨーロッパの主要なオーケストラに客演、「プラハの春」音楽祭にも出演している。

N響との共演は1994年7月の特別公演に始まったが、定期公演は97年5月、99年10月に次いで今回が3回目となる。海外ではニーベルングの指環 全曲を十数回指揮した経験をもつワーグナー演奏の権威として知られ、N響とは97年に《ワルキューレ》第1幕、98年に《第9》公演の前半で《タンホイザー》の一部を指揮している。

# 1月定期の聴きどころ

1月定期は、来年没後100年を迎えるドヴォルザーク(1841-1904)の作品がプログラムのひとつの核になる。チェコ生まれのコウトを久しぶりに指揮台に迎え、来年を見据えたプログラムだ。コウト自身も2003年のN響をドヴォルザークで始められるのは非常に名誉なことだと喜んでいる。

Aプログラムでは、まずドヴォルザークの作曲したふたつの《スラヴ舞曲集》から名曲を集めた抜粋が演奏される。《スラヴ舞曲集》はチェコの民俗的色彩が色濃く出た作品であり、ブラームスの《ハンガリー舞曲集》と対をなす作品でもある。とはいえ《ハンガリー舞曲集》は今日、その数曲がアンコール曲として演奏されるのに比べ、《スラヴ舞曲集》はしばしばコンサートのメイン・プログラムになっている。素晴らしいオーケストレーションとコウトの音楽に耳を委ねていただきたい。また、コウトがこれまで成功してきたショスタコーヴィチの交響曲が取り上げられ、今回は《第1番》が演奏される。この曲についてコウト自身は「彼が18歳の学生時代に作曲したこの作品は天才的だ。私個人の体験からも、とても身近に感じる。私自身、共産主義政権のもとで迫害され、自殺を考えたこともある。この音楽の、たとえば第3楽章のグロテスクさ、これは作曲者の抵抗を表わすものだ。第4楽章は大笑いし、そして失望を感じさせる。とても他人ごとには思えない。私の感情と一致する作品だ」と言う。

Bプログラムでは、まずドイツ・ロマン派の作品、ウェーバーの《魔弾の射手》序曲が演奏される。ここではこのオペラを何回も指揮している、オペラ指揮者コウトの音楽を聴いてみたい。続いてハンガリーのチェリスト、ミクローシュ・ペレーニを独奏者に迎え、同じドイツ・ロマン派に属する作曲家、シューマンの《チェロ協奏曲》が演奏される。ペレーニは派手な音楽家ではない。しかし今や数少ない中部ヨーロッパ出身の孤高のチェリストとして評価されている。さらに彼は室内楽やソロ活動以外、教育活動でも注目されている。

そして、ドヴォルザークの《交響曲第9番》。クーベリック亡き後、チェコで尊敬を集めるコウトが得意とする曲でもある。『新世界から』とも呼ばれて親しまれているこの曲について、コウトはこう言う。

岸 浩

(A,Bプロ)  
&

来住千保美

(Cプロ)

「私にとってのドヴォルザークは実に単純な人間だ。《第9番》はアメリカ時代の作品だが、忘れてはならないことがある。それは、彼が1年以上アメリカにいて、故郷へ帰ろうとしたとき、マネージャーから家族を呼び寄せたらと言われ、大喜びしたときに書いた作品だということだ。だからこの作品には故郷に対する強い憧れや悲しみはない。第2楽章には痛みなど何もない。ただただ肯定的な感情だけだ。家族が来るのだから、メランコリックさなどまったくない」

Cプログラムでは、コウトが得意のレパトリーからワーグナーを取り上げる。音楽史上の最高傑作のひとつ、ニーベルングの指環上演には4日間約15時間を要する。チクルス上演は簡単ではない。その魅力を少しでも体験できるようにと、19世紀後半からさまざまな短縮版、編曲版がつくられてきた。今回演奏するのは「コウト版」だ。コウトはベルリン・ドイツ・オペラでロリオ(本名ヴィコ・フォン・ビューロー)版を指揮しており、ヒューマニズムあふれるロリオ版は高い評価を得ている。ただロリオ版も演奏には3時間を要する。このため、ロリオ版の精神をもとにコウトがN響定期のために特別に考えたのがこのプログラムだ。

歌手はブリュンヒルデ、ジークフリート、そしてヴォータン(さすらい人)の3人。中心はブリュンヒルデだ。したがって序夜《ラインの黄金》はない。《ワルキューレ》では若い娘のブリュンヒルデが、《ジークフリート》では恋する乙女となり、《神々のたそがれ》では裏切られ、絶望し、復讐し、救済する女性となる。1人の女性の成長過程を音楽の成熟度と共に辿っていくという趣向だ。ブリュンヒルデに2人の男性、父親ヴォータンと夫ジークフリートが絡む。《ワルキューレ》では父娘関係、《ジークフリート》ではジークフリートのアイデンティティーと恋におちる2人が中心だ。最初にテキストが書かれ、最後に作曲された《神々のたそがれ》が休憩後に演奏される。これにはベルリン・ドイツ・オペラ版が使用される。編者は不明だが、音楽とドラマトウルギーを損なうことなく最高度の緻密さと充実さを保つ。今回登場する3人の歌手は、ヨーロッパの旬のワーグナー歌手だ。若さあふれる歌唱で一夜の指環を堪能したい。



## PROGRAM

第1478回 1月9日(木)・10日(金) 7:00pm  
NHKホール

The 1478th Subscription Concert  
on 9th (Thu.) & 10th (Fri.) Jan.  
at 7:00pm in the NHK Hall

指揮

イルジ・コウト

Jiří Kout *Conductor*

コンサートマスター

篠崎史紀

SHINOZAKI, Fuminori *concertmaster*

### ドヴォルザーク/スラヴ舞曲集 作品46 & 72(抜粋)(40)

Antonín Dvořák (1841-1904) Slavonic Dances op.46&72 (excerpts)

作品46から 第1番八長調/第2番ホ短調/第3番変イ長調/第6番二長調/第8番ト短調  
作品72から 第1番ロ長調/第2番ホ短調/第7番八長調

op.46 ~ No.1 C major / No.2 e minor / No.3 A-flat major / No.6 D major / No.8 g minor

op.72 ~ No.1 B major / No.2 e minor / No.7 C major

休憩

Intermission

### ショスタコーヴィチ/交響曲 第1番へ短調 作品10(35)

Dmitry Shostakovich (1906-1975) Symphony No.1 f minor op.10

I Allegretto II Scherzo; Allegro

III Lento IV Allegro molto

ドヴォルザーク  
スラヴ舞曲集 作品46 & 72 (抜粋)

▶ 一口にスラヴといっても、東と西では、気候も、気質も、そして文化的風土も大いに異なる。とくにチェコの場合、ソ連崩壊に端を発する「共産圏」の消滅後、ドイツ文化圏との地続きをより強調する「中欧」の括りのもとで語られることが多い。たしかに、モスクワを発ち、ブラハの空港に降り立った旅行者が感じる、一種独特の華やぎや落ち着きは、チェコがもはやロシアと同じ文化圏にはないことを教えるものだ。俗にいうボヘミアの香りも、スラヴ特有の人間臭さと西欧風の洗練、あるいは素材と精神の絶妙なブレンドを言うのだろう。

ドヴォルザーク(1841-1904)の初期の代表作《スラヴ舞曲集》は、まさにこの、中欧ならざる中庸の精神が息づき、どれひとつとっても、チャイコフスキー風の過剰さに陥ることはない。しかし同時にこの作品は、ブラームスと親交を結び、ドイツ系の絶対音楽に強い憧れを抱く彼が、ある意味で自己確立をはかった作品でもある。ブラームスの口ぞえもあり、ドイツの出版業者ジムロックから、2巻の舞曲集の作曲を依頼された彼は、ブラームスのハンガリー舞曲とは異なるアプローチを模索するにいたった。原曲重視の立場をとるブラームスに対し、彼は、民俗的なものの模倣をリズムやイントネーションなどの外形的部分にとどめ、旋律はすべて自らのクリエイティブな力で練り上げた。その筆舌を超える美しさと躍動感が、ただちに人々の心を魅了した。使われた素材は、生まれ故郷のボヘミアはもとより、スロヴァキア、ポーランド、ウクライナ、セルボ・クロアチアなど広く周辺地域に及び、スラヴ舞曲の一大カーニバルとでもいふべき観を呈している。

第1集(作品46)が刊行されたのは、1878年。はじめ4手ピアノ版で出され大いに人気を呼んだが、まもなく管弦楽版が出ると、世界中のオーケストラが競ってこれを演奏するようになった。出版の成功に気をよくしたジムロックは、第2集の作曲を直ちに依頼したが、実際に彼がスコアを手にしたのはそれから8年後のことだった。第2集(作品72)では、引用の形式はより自由闊達さを増し、表面的な効果は多少抑えられているものの、オーケストレーションの

精度にはより磨きがかけられている。全16曲中、今日演奏されるのは8曲。第1集から5曲、第2集から3曲が選ばれている。

#### 《作品46》より

第1番：ハ長調の「プレスト」で、活気に溢れた陽気なフリアント。

第2番：ホ短調の「アレグレット・スケルツァンド」で、ドゥムカと呼ばれるウクライナ風の優美な旋律にはじまり、賑やかな中間部をもつ3部形式。

第3番：変イ長調の「ポーコ・アレグロ」で、ロンド風の形式をもつポルカ。

第6番：ニ長調の「アレグレット・スケルツァンド」で、ソウセツカーと呼ばれる、気品とユーモアに満ちたボヘミア風レントラー。

第8番：ト短調の「プレスト」で、第1曲同様、緩急のコントラストをみごとに生かした緊迫感溢れるフリアント。

#### 《作品72》より

第1番：ロ長調の「モルト・ヴィヴァーチェ」で、スロヴァキアの踊りを素材にする明るく賑やかな舞曲。

第2番：ホ短調の「アレグレット・グラツィオーソ」で、ドゥムカ、ソウセツカーに似る優雅で感傷的な舞曲。

第7番：ハ長調の「アレグロ・ヴィヴァーチェ」で、セルボ・クロアチアのコロと呼ばれる舞曲を素材にした陽気で澆刺たる気分に溢れる。

作曲年代：第1集は4手ピアノ版、管弦楽版ともに1878年、第2集は4手ピアノ版が1886年、管弦楽版が1886～87年。

初演：第1集は1878年5月16日、ブラハ。アドルフ・チェフの指揮により第1, 3, 4番が演奏された。第2集は1887年1月6日、同じブラハで作曲家自身の指揮によって。

楽器編成：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、トライアングル、弦5部。

シヨスタコーヴィチ  
交響曲第1番へ短調作品10

▶ 芸術家はその出発点で「革命」をみずからの理想とする例はけっして少なくない。かつては革命が、不平等や貧困から人々を救う唯一の手段とみなされていたとなれば、なおさらのことだ。たとえば、ドミートリ・シヨスタコーヴィチ(1906-1975)。革命の都ペテルブルグで生まれた彼が、帝政ロシア時代の抑圧や、第1次世界大戦での<sup>おびただ</sup>夥しい死者を目にした後で、革命のもつ暴力にある程度まで寛容になったとしても非難するにはあたらぬ。

レニングラード音楽院の卒業制作として書き上げられた《交響曲第1番》は、革命世代によって書かれたソヴィエト最初の交響曲である。何よりも特筆すべき点は、この作品が生まれるきっかけのひとつに、1924年1月のレーニンの死があったことだ。作曲家自身、後にこう回想している。「レーニンの死の強烈な印象のもとにあった。……レーニンの思い出に捧げる大きな交響曲を書こうという考えが浮かんだのはまさにその時だった。しかし、当時18歳の青年の非力をもって、その壮大な夢を完遂させることは不可能だった。1年後、音楽院の卒業をめざし、新たな交響曲に着手した彼が、第2楽章から作曲をはじめた事実が、その間の彼の迷いを暗示している。マーラー風のドラマを受け入れるべきか、否か。その問いは、ソヴィエトという閉じられた世界で未来を切り開こうとする作曲家にとって、決定的な意味を持ったはずだ。なにしろ、レーニン廟の「遺体」が無言で呼びかけていたのが、リアリズムへの回帰だったこともある。リアリズムこそは、芸術家の敬虔さをはかる尺度となり、その前ではいかなる形式上の飛躍も許されない。他方、ほぼ一代遅れて登場したアヴァンギャルド青年にも、亡きレーニンへの思いとともに、他に譲ることのできない自負があった。

《交響曲第1番》は、それらふたつのモメントの激しい競合のうえに成りたった作品である。最終的に彼が選びとったのは、古典的な4楽章形式だが、そうしたアカデミズムの書割そのものをも相対化しなければならない。「ロジックの鉄鎖」に導かれた彼の戦略は、第1楽章冒頭、ミュート付トランペットの序奏から軽妙に捻りだされるファゴットの独奏にすべて集約された。ストラヴィンスキーの《春

の祭典」と好一對をなしつつ、20世紀ロシア音楽は、ファゴットの道化的身ぶりとともに幕を明けたといっても過言ではない。

第1楽章(アレグレット)は、人を食ったような、風変わりな出だしで聴き手を慌てさせる。銜いや気負いはいっさいなく、楽章全体が“オケ・コン”的な色彩を強めつつ、徐々に複雑なテクスチャーを織りあげていく。

第2楽章(アレグロ)は、まさにアイディアの宝庫である。大胆かつ鋭角的な旋律とリズムが、キュビスムの絵をほうふつとさせる。ピアノによる3回の打鍵、パーカッションが披露する軽妙なひねり技は、同時代のアヴァンギャルドが好んだキャバレーや見世物小屋風のユーモア精神に通じるものだ。

レーニンの死との関わりを敢えて見るなら、叙情的かつ叙事的な第3楽章(レント)に関連づけるのが正しい。葬送行進曲風の第2主題がそうである。小太鼓の小気味良い響きとともに幕を上げる第4楽章(アレグロ・モルト)では、異化の手法を数珠つなぎした自由奔放なパッセージが繰り出され、ついには「deus ex machina(機械仕掛けの神)」風に唐突ながらも、燦然たるフィナーレを迎える。

1926年5月12日、ニコライ・マリコの指揮によるレニングラードでの初演は大成功を収め、第2楽章がアンコールに演奏された。その後、ブルーノ・ワルターがベルリン初演を行ない、作曲家の名声は瞬く間に世界に広がった。記念すべき5月12日をショスタコーヴィチはその後生涯にわたって祝いつづけるが、この作品で果たせなかったレーニン交響曲の構想は、10月革命10周年にあたる翌27年へと満を持して持ち越すことになる。

作曲年代：1925～1926年。

初演：1926年5月12日、ニコライ・マリコの指揮により、レニングラード・フィルハーモニー大ホールにて。

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、タムタム、トライアングル、大太鼓、小太鼓、チューブラベル、ピアノ1、弦5部。



自宅で今回のプログラミングについて語るイルジ・コウト。撮影：岸 浩



## PROGRAM

第1479回 1月15日(水)・16日(木) 7:00pm

サントリーホール

The 1479th Subscription Concert  
on 15th (Wed.) & 16th (Thu.) Jan.  
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮

イルジ・コウト

Jiří Kout *Conductor*

チェロ

ミクローシュ・ペレーニ

Miklós Perényi *cello*

コンサートマスター

堀 正文

HORI, Masafumi *concertmaster*

ウェーバー / 歌劇「魔弾の射手」序曲 作品77(11)

Carl Maria von Weber (1786-1826) “Der Freischütz”, overture op.77

シューマン / チェロ協奏曲 イ短調 作品129(24)

Robert Schumann (1810-1856) Cello Concerto a minor op.129

I Nicht zu schnell II Langsam III Sehr lebhaft

休憩

Intermission

ドヴォルザーク / 交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」(45)

Antonín Dvořák (1841-1904) Symphony No.9 e minor op.95 “From the New World”

I Adagio – Allegro molto II Largo

III Molto vivace IV Allegro con fuoco

ウェーバー  
 歌劇「魔弾の射手」 序曲 作品77

▶ 数多くのオペラの序曲なかでも、ウェーバー(1786-1826)の《魔弾の射手》の序曲ほど独立して演奏される曲はおそらくない。その理由のひとつに、序曲に劇中で用いられる数々の重要な動機が現われ、いわば序曲がオペラ全体の縮図として構成されていることがある。

ウェーバーがこのオペラの創作をはじめた頃、オペラ創作は転換期にあった。18世紀後半からオペラ作曲家たちは、アリアで声楽の技巧を誇示することに中心を置くことから脱し、オペラ全体の構成を重視し始めた。こうした状況のなかでウェーバーは、ドイツ・オペラの使命が、オペラをさらに音楽的に統一性のあるひとつの芸術ジャンルへと高めることにあると考えていた。彼がこの目標を最初に実現したオペラが、ドイツの民衆的な伝説や民謡に基づいた《魔弾の射手》であった。

1821年6月18日のベルリンでのオペラ全曲の初演で、《魔弾の射手》は大成功を収め、ドイツ語圏の各地で上演されるようになった。《魔弾の射手》は、すぐにドイツの代表的なオペラとみなされるようになり、後にワーグナーに多大な影響を与えた。

曲の序奏部では、ホルンの四重奏がドイツの森の世界を描き出し、弦楽器のトレモロが中心になって不気味な雰囲気を作り出す。つづいて主部で提示される主題は、第1幕第4場で主人公マックスが、絶望感にとらわれながら歌うアリアで用いられる。次に、クラリネットとヴァイオリンによって提示される主題は、第2幕第2場でマックスの恋人アガーテが彼への想いを喜びに満ちあふれて歌うアリアで現われる。この明るい旋律は序曲とオペラ全体の両方の最後で用いられ、このドラマがハッピーエンドであることを示している。

作曲年代：1817年～1821年。

初演：全曲は1821年6月18日ベルリン王立劇場で、序曲は1820年7月31日ハレで、両方とも作曲者自身の指揮による。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦5部。

シューマン  
チェロ協奏曲イ短調  
作品129

▶ 1850年9月、シューマン(1810-1856)は、デュッセルドルフ市の音楽監督に就任し、ドレスデンからライン河沿いのこの都市に移ってきた。デュッセルドルフの人々はシューマン一家を温かく迎えた。この地でシューマンは、《交響曲第3番「ライン」》などの晩年の傑作を作曲する。《チェロ協奏曲》は、シューマンがデュッセルドルフで最初に作曲した曲。彼は、1850年10月10日にこの協奏曲のスケッチをはじめ、デュッセルドルフでの最初のコンサートの日である同月24日に同曲を完成させた。

シューマンがこの《チェロ協奏曲》を作曲した1850年頃には、チェロ協奏曲というジャンルは、ピアノ協奏曲やヴァイオリン協奏曲と違ってまだ確立されていなかった。もちろん、ハイドンやボックリーニがチェロ協奏曲を作曲していたが、当時はまだ知られていなかった。シューマンは、チェロの名手ではなかったにもかかわらず、チェロ協奏曲というジャンルで金字塔を打ち立てたのであった。

1850年11月16日付けの日記でクララ・シューマンは、夫ロベルトのチェロ協奏曲について、「私はとても気に入った。この協奏曲では、とくにチェロの特色が、とても正しくいかされていると思う」と称賛している。しかし、ロベルトはすぐにこの協奏曲を発表しようとしなかった。彼は、1851年から52年にかけてフランクフルトのチェロ奏者ロベルト・エミール・ボックミュールとの往復書簡のなかでこの協奏曲について論じ合った。結局シューマンは、基本的にボックミュールの提案に従わず、部分的に彼の提案を受け入れている。それは、第1楽章のテンポの指示を遅くしたことや、チェロの指使いやフレーズの切れ目を変えたことである。シューマンは、ボックミュールの独奏で1852年5月にこの協奏曲の初演を企画したが、これは実現されなかった。

その後、チェロ協奏曲は、1854年に出版されることにはなったが、シューマンの生前には演奏されなかった。従来、この協奏曲の初演は、1860年6月9日にライプツィヒでシューマンの生誕50年の記念演奏会で行なわれたと言われてきた。このデータは、1909年から用いられ始めたようで、今日でも流布している。しかし、この日

の演奏会は室内楽の演奏会であり、オーケストラが加わっていたという記録も残っていない。したがって、このデータは通常の意味での初演とは考えられない。この曲が演奏されたという最初の記録は、1867年12月10日のプレスラウでの演奏であるが、おそらくこれ前に、すでに初演は行なわれていたであろう。

全体は3つの楽章から構成されているが、切れ目なく演奏される。

第1楽章(あまり速すぎずに)は、弦楽器のピッツィカートを伴って、木管楽器による3つの和音によって始まる。この和音に導かれて、独奏チェロが抒情豊かな第1主題を提示し、華やかなパッセージをはさみながら展開していく。総奏が入り、続いて独奏チェロが第2主題を提示する。楽章全体が独奏チェロとオーケストラとの対話によって見事に展開されていく。なお、楽章冒頭の3つの和音は、この曲全体の核となっており、形を変えながらしばしば現われる。

第2楽章(ゆるやかに)は橋渡的な役割を担っている。独奏チェロがメランコリックな旋律を奏でていく。この独奏チェロの旋律の一方で、オーケストラのチェロによる対旋律も演奏され、チェロの二重奏が展開される。楽章の後半は「いくらか生き生きと」になり、第1楽章の第1主題の前半がフルートとクラリネットによって、後半が独奏チェロによって挿入される。続いてあのメランコリックな旋律が現われ、独奏チェロの主導で次第に速度が増していき、第3楽章(とても生き生きと)に入る。速く動きのあるこの楽章では、独奏チェロが技巧的なパッセージを繰り返していき、コーダでは、オーケストラを伴うカデンツァが現われる。最後に速度を増していき、力強く全曲が閉じられる。

作曲年代：1850年10月。

初演：不明。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦5部、チェロ独奏。

## B PROGRAM

### チェロ ミクローシュ・ペレーニ

Miklós Perényi cello

奥田佳道

ペレーニがシューマンを弾く。もうこれだけで、ほぼ緩む聴き手も多いのではないだろうか。求道的とも評せる真摯な解釈、詩情をたたえたチェロの音色が、匂やかに舞う予感。中欧の名匠コウトの指揮に導かれ、ロマン派の精髓が紡がれるひととき。オーケストラと文字通り「協奏」が求められる夢幻的な名協奏曲だけに、呼応するN響への関心もいつになく高くなるだろう。第2楽章は独奏チェロと首席奏者による「二重唱」の趣、両端楽章でもソロとオーケストラは終始寄り添っている。

2000年2月(1月Cプロ扱い)の定期で、ブラームスの《ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲》を弾いたペレーニ。同郷の盟友イヴァン・フィッシャーの指揮、カナダの若手ジェームズ・エーネスとの緊密な対話は、今なお忘れ難い。華やかな意味でのスターではないが、現代を代表する実力派チェリストの1人である。

ミクローシュ・ペレーニ。1948年ハンガリー生まれ、今年55歳になる。神童として知られ、9歳の時にプロフェッショナルな初舞台を経験しているという。ブダペストのフランツ・リスト音楽院でタートライ弦楽四重奏団のエデ・バンダ、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院でエンリコ・マイナルディに学び、63年、ブダペストで開催されたパブロ・カザルス国際チェロ・コンクールに入賞。ここで晩年のカザルスに認められ、



欧米で開催されていた彼のマスターコースに招かれるようになる。その後、アメリカのマールボロ音楽祭でルドルフ・ゼルキン、カザルスらと共演、国際的な知名度を高めたのだった。74年には、早くも母校フランツ・リスト音楽院の教授に迎えられた。

これまでにフォーレの《ソナタ第1&2番》、フランツ・リスト室内管弦楽団とのハイドンの《協奏曲第1&2番》、I.フィッシャー指揮ブダペスト祝祭管弦楽団とのドヴォルザーク、ヒンデミットなど、優れたレコーディングも数多く残している。

1978年3月、初めて日本を訪れ、岩城宏之指揮のN響第745回定期でエルガーの協奏曲を披露。ピアノのデジャー・ランキとのデュオ・リサイタルも賞賛を博した。79年12月にはピエロフラーヴェク指揮のN響青少年のためのプロムナード・コンサートでドヴォルザークを、ややあって、97年2、3月にはI.フィッシャーの指揮で、やはりドヴォルザークを弾いている。

ドヴォルザーク  
交響曲第9番 水短調 作品95「新世界から」

▶ 少し古いデータになるが、1996年の7・8月号の『フィルハーモニー』によると、同年6月30日までのN響の全演奏記録のなかで、ドヴォルザーク(1841-1904)の《交響曲第9番「新世界から」》は、300回で第3位になっている(ちなみに第1位は334回でベートーヴェンの《交響曲第5番》、第2位は301回でベートーヴェンの《交響曲第9番「合唱付き」》)。

しかし、5年ごとに区切って年代別に演奏回数の推移を示したグラフを見ると、「新世界から」は1972年から76年の間に60回も演奏されている。この回数はほかの曲よりもかけはなれて多い。近年N響の演奏会では、「新世界から」がこの時期ほど演奏されることはなくなっているが、日本人にとってやはり馴染み深い曲である。

初演当時は評価されなかった曲は数多くあるが、「新世界から」は、1893年12月16日にニューヨークのカーネギー・ホールで初演された時にも聴衆から喝采を受けた。この初演の成功は、ドヴォルザークの生涯の中でも最大のものであった。当時のアメリカでのドヴォルザーク人気はすさまじく、彼の名前の入ったカラー襟やネクタイ、ステッキが売られたほどであった。

初演の成功は、当時のアメリカの文化的状況と無関係ではない。ドヴォルザークが、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー夫人からの招聘を受けて、同音楽院の最初の院長に就任したのは1892年であった。サーバーは、当時まだ確立されていなかったアメリカ独自の芸術音楽の確立を期待していた。サーバーだけではない。1892年はコロンブスのアメリカ「発見」400周年にあたり、当時多くのアメリカ人が自分たち独自の芸術音楽の確立に関心を寄せていた。ドヴォルザークのニューヨークでの最初の演奏会(10月22日)についての新聞批評には、ドヴォルザークが音楽的にアメリカを「発見」することへの期待が述べられている。

こうして、ドヴォルザークはアメリカ的な音楽を求める状況の中に巻き込まれていく。彼のアメリカでの最初の作品である《交響曲第9番》は、彼自らが「新世界から」と名付けたこともあって、アメリカの人々の関心を引くことになった。実際には、彼は「新世界か

ら」で、アフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民の音楽を想起させるものの、そのまま用いることはしていない。彼は、それらの音楽に深く影響を受けながらも、彼自らの旋律によって楽章間すべてに見事な連関性を築き上げている。

第1楽章(アダージョ アレグロ・モルト)は、序奏(アダージョ)を伴うソナタ形式。ゆっくりと始まるが次第に速度を増していき、ホルンが第1主題を力強く提示すると、推進力のある音楽が繰り広げられていく。

第2楽章(ラルゴ)と第3楽章(モルト・ヴィヴァーチェ)は、アメリカの詩人ヘンリー・ウォズワース・ロングフェローのアメリカ先住民の伝説的な英雄を題材した叙事詩『ハイアワサの歌』(1855)から着想を得ている。マイケル・ベッカーマンの研究によれば、第2楽章では、コール・アンブレによる有名な旋律がハイアワサとミネネハハの帰途の旅の風景に、中間部のオーボエとクラリネットによる荘重な旋律がミネネハハの森の葬式に基づいている。なお《家路》という有名なタイトルは、1922年にドヴォルザークのアメリカでの弟子ウィリアム・アームズ・フィッシャーが編曲した際に付けたもの。

第3楽章はスケルツォで、冒頭はベートーヴェンの《第9》のそれを想起させる。ハイアワサの結婚式での踊りが描写されている。

第4楽章(アレグロ・コン・フォーコ)は、序奏を伴うソナタ形式。すべての楽章の主題が回想されながら、音楽が盛り上がっていく。

作曲年代：1893年1月～5月。

初演：1893年12月16日(この日前日に公開リハーサルが行なわれている) アントン・ザイドル指揮のニューヨーク・フィルハーモニック協会管弦楽団による。

楽器編成：フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2(コール・アンブレ1)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、弦5部。



ワーグナーのスコアを手にするイルジ・コウト。自宅にて。撮影：岸 浩



## PROGRAM

第1480回 1月24日(金)7:00pm・25日(土)2:00pm

NHKホール

The 1480th Subscription Concert

on 24th (Fri.) & 25th (Sat.) Jan.

at 7:00pm (Fri.) 2:00pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮

イルジ・コウト

Jiří Kout *Conductor*

ブリュンヒルデ スーザン・オーウェン(ソプラノ) ジークフリート アルフォンス・エーベルツ(テノール)  
Brünnhilde Susan Owen *soprano* Siegfried Alfons Eberz *tenor*

ヴォータン フルーデ・ウルセン(バス・バリトン)  
Wotan Frode Olsen *bass bariton*

コンサートマスター

山口裕之

YAMAGUCHI, Hiroyuki *concertmaster*

### ワーグナー/「ニーベルングの指環」(抜粋)

Richard Wagner (1813-1883) “Der Ring des Niebelungen” (excerpts)

#### 「ワルキューレ」より(20)

第2幕の序奏 さあ、馬に鞍を置き、天翔ける戦乙女よ!

第3幕第3場; 今生の別れた、あっぱれな戦乙女!

#### 「ジークフリート」より(22)

第2幕第2場; あいつが私の父親でないことが分かって

第3幕の序奏 ~ 起きろ、ヴァーズ(エルダ)

第3幕のフィナーレ; わたしは永劫の時を生きてきた

#### “Die Walküre” —

Act 2; Vorspiel — Nun zäume dein Roß, reisige Maid!

Act 3; Leb’ wohl, du kühnes, herrliches Kind!

#### “Siegfried” —

Act 2; Daß der mein Vater nicht ist,

Act 3; Wache, Wala!

Act 3; Ewig war ich, ewig bin ich,

休憩

Intermission

#### 「神々のたそがれ」より(40)

第1幕; 夜明け ジークフリートのラインへの旅

第3幕第2場; ブリュンヒルデ! 聖なる花嫁よ!

ジークフリートの葬送行進曲

第3幕のフィナーレ; 太い薪を、ラインの河縁に

幾重にも積み上げよ!

#### “Götterdämmerung” —

Act 1; Morgendämmerung und Siegfrieds Rheinfahrt

Act 3; Brünnhilde! Heilige Braut!

Siegfrieds Traumermarsch

Act 3; Starke Scheite schichtet mir dort am Rande

des Rheins zu Hauf!

ワーグナー  
ニーベルングの指環  
(抜粋)

▶ ワーグナー(1813-1883)の「ニーベルングの指環」4部作は、世界が没落してゆく過程を描いた物語で、そこには人類永遠の課題である「愛と権力の葛藤」というテーマが1本の赤い糸のように張り渡されています。この葛藤に直面するたびに、登場人物たちは決断を迫られ、はかない希望を抱き、そして挫折してゆくのです。あるいは、その過程のなかで登場人物の内面に大きな変化が起きるところに「指環」の奥深さがあるとみてもよいでしょう。

《ワルキューレ》第2幕冒頭「さあ、馬に鞍を置け、天翔ける戦乙女よ！」は、主神ヴォータンが愛娘ブリュンヒルデに命令をくだす場面です。主神は契約＝法をつかさどる立場にあるため、いちど手放した指環(権力の象徴)をみずから奪還することはできません。主神は自分の血を引いた英雄ジークムントにその仕事を委ねようという戦略を立てたわけですが、この時点では、まだ「代理戦争」の矛盾に思い至っていません。風雲急を告げるオーケストラの序奏、戦の帰趨を決する主神の命令、それに嬉々として盲従する愛娘の叫び(おぞましい増3和音の連発)……、これらすべては権力維持を願うヴォータンの身勝手な計画の結果にほかならないのです。

第3幕「ヴォータンの告別：今生の別れだ、あっぱれな戦乙女！」は、主神が自分の命令に背いた愛娘を眠りに封じ込め、彼女に別れを告げる場面です。妻フリッカの介入によって主神の計画はあえなく挫折し、ジークムントは殺されてしまいます。しかし主神は、愛娘が自分の真意を知ったうえで逆らったことを知り、またジークリンドがジークムントの遺児を身ごもっていることを知り、眠りにつく愛娘を炎の輪で守ってやろうと決心します。「この穂先を／恐れる者は／炎の輪を越えるべからず！」と。このときオーケストラには、まどろみの動機や炎の動機を背景に、これから生まれてくるジークフリートの動機が力強く立ち現われて、ブリュンヒルデの眠りを覚ます英雄の到来を予告するのです。

《ジークフリート》第2幕「あいつが父親でないことが分かってほんとにせいせいしたな！」は、森のなかで主人公1人が物思いにふけ

る場面。この作品は題名が示すようにジークフリートの成長過程を描いていますが、とくに「森のさざめき」が主人公に意識下への旅をうながしていることに注目したいと思います。すでに世を去った父親は、おそらく自分に生き写しだったろう。しかし、自分を産んで死んだ母親については「さっぱり見当がつかない」。そして「俺は息子なんだからさ／せめてひと目、母親に会ってみたいよ！／俺の母親　／人間の女に！」とつぶやくとき、自分に何かが欠けていることを本能的に察知していた主人公は、無意識のうちに母親というチャンネルを通じて、ようやく自分の求めているのが異性「人間の女」であることに思い至るのです。「森のさざめき」や「小鳥の声」を描する繊細微妙なオーケストレーションが聴きどころです。

第3幕冒頭「起きろ、ヴァーラ」は、さすらい人(ヴォータン)が地母神エルダに事の成りゆきを伝えにゆく場面。《ジークフリート》は大蛇退治や眠り姫のエピソードにみられるように、基本的にメルヒェン仕立ての物語ですが、ここではワーグナー自身が「大きな世界悲劇の中心に行きついている」と述べているように、また音楽が雄弁に物語っているように、ジークフリートの物語が世界史のパノラマのなかに位置づけられています。

第3幕の幕切れ「わたしは永劫の時を生きてきた」は、未来を担うカップルの二重唱。ブリュンヒルデはジークフリートの性急な求愛に恐怖をおぼえますが、やがて彼に身を委ねることを決心します。ただ、これは単なる愛の二重唱ではありません。現在にのみ生きる男の「太陽に祝福あれ！」と、過去を知りつくしている女の「(神々よ) 歓びのうちに滅びるがいい！」が鋭く反発するところには、つづく《神々のたそがれ》、すなわち新たな悲劇の導火線が埋め込まれているとみてよいでしょう。

さて、4部作も大詰めに近づいた《神々のたそがれ》序幕の「夜明け」と「ジークフリートのラインへの旅」は、ひとつに結ばれたジークフリートとブリュンヒルデが旅立ちにあたって交わす対話の前後に置かれたオーケストラの間奏曲です。「夜明け」は、ト書きに「朝焼

けが広がり、谷底の炎の照り返しもしだいに薄くなる。 日の出。陽の光がみなぎり溢れる」とあるように、自然の描写にほかならないのですが、それは同時に、息の長い高揚効果を演出する ブリュンヒルデの愛の動機（クラリネットからヴァイオリンへ）と、その頂点に現われる壮大な ジークフリートの英雄の動機（金管楽器群）が語る

譜例 1

Musical score for Example 1, featuring Clarinet (Kl.) and Bass Clarinet (B. Kl.) parts. The music is in 3/4 time and marked *p (sehr weich)*.

譜例 2

Musical score for Example 2, featuring Trumpet (Tp.), Trombone (Pos. Tub.), and Percussion (Vc. KB. Tub., Rührtrommel, Triangel). The music is in 3/4 time and marked *ff*.

ように、ふたりの心理状態を先取りしているとも考えられます。ブリュンヒルデの「愛」によってジークフリートは真の「英雄」になったわけですが、彼女は人間の女になってしまった自分を卑下し、「私たちの命である / 愛を忘れないで」と小うるさい母親のように英雄の身を案じます。ひたすら「新たな 勲いさおしを求めろ」ジークフリートとのあいだには、ふたつの動機の差異に象徴されるように、すでに大きな亀裂が生じていると言えましょう。やがてブリュンヒルデの懸念は現実のものとなり、ジークフリートは忘却の魔酒によって彼女を裏切り、彼女も怒りのあまり彼を裏切ることになります。つまり、この場面は否定されるために存在する愛の謳歌であり、それゆえに「ジークフリートのラインへの旅」は、やぶれかぶれと言ってよいほどに威勢がいいのです。

第3幕「ブリュンヒルデ！ 聖なる花嫁よ！」と「ジークフリートの葬送行進曲」は、いわば 指環 の第1フィナーレ。英雄は偽誓を理由に背中を槍で突かれて、死の直前に「ブリュンヒルデの目覚め」

(《ジークフリート》第3幕)を回想します。いや、回想というよりも、目の前の出来事のように幻視するのです。ここでは世界のことなど眼中になく、ひたすらブリュンヒルデへの愛が歌い上げられ、さらに「この身の消えゆく／至福のおののき！／ブリュンヒルデの祝福を　一身に受けて！」と視線を未来(幕切れの救済)に向けつつ、ジークフリートは息絶えます。つづく「葬送行進曲」には、つねに挫折を強いられてきた一族に関する示導動機が、父と母の愛にまつわる示導動機が、そしてジークフリート自身の生涯を回想する示導動機が順を追って立ち現われますが、それらが総括にふさわしく、すべて初出の調性で回帰してくるところにも注目すべきでしょう。とりわけ忘却の薬が効いていたあいだには現われなかった「汚れなき八長調」が、ようやくこの場面で復帰してくるのも「浄化」の効果を実立させる一因となっています。

「太い薪をラインの河縁に幾重にも積み上げよ！」(ブリュンヒルデの自己犠牲)は、妻ブリュンヒルデが夫ジークフリートの火葬を整え、後を追って燃えさかる炎に身を投じる 指環 の第2フィナーレ。あれほど誠をつくしたジークフリートが、なぜ自分を裏切る羽目になってしまったのか。彼女の問いかけ「なぜこんなことになったのか、お分かりですか？」は、この言葉を発したのちに「天空を見上げて」とあるように、ヴォータンあるいは神々の世界に向けられた問いというよりも、むしろ観客に向けた問いと解すべきでしょう。いとも簡単に愛を押し潰してしまう権力志向……彼女は呪われた指環をラインの流れに戻す決心をして、神々の世界に引導を渡します(「こうして　ヴァルハルの栄華を誇った城に／炎を投じよう！」)。

こうして火災と洪水によって旧世界は崩壊するのですが、はたしてそのあとに、よりよい世界が到来するのでしょうか？　少なくともブリュンヒルデは、そのことについて何も言及していません。しかし、幕切れのオーケストラに《ワルキューレ》第3幕、受胎告知を受けて魂を洗われたジークリンデの旋律 愛による救済の動機 が幅広く回帰してくるように、ワーグナーは未来に一抹の希望を託しているのです。

作曲年代：1851年 1871年( ニーベルングの指環 全曲 )

初演：( 4部作として )1876年8月13、14、16、17日、バイロイト祝祭劇場で、ハンス・リヒターの指揮による。

楽器編成：《ワルキューレ》フルート4(ピッコロ2) オーボエ3、  
コール・アングレ1、クラリネット3(D-クラリネット1)、  
バス・クラリネット1、ファゴット3、ホルン8(ワーグナー・チューバ4)、  
トランペット3、バス・トランペット1、  
トロンボーン3、コントラバス・トロンボーン1、チューバ1、  
ティンパニ2、フィールド・ドラム、グロッケンシュビール、  
トライアングル、シンバル、ハーブ2、弦5部。

《ジークフリート》フルート3、ピッコロ1、オーボエ3、  
コール・アングレ1、クラリネット3、バス・クラリネット1、  
ファゴット3、ホルン8(ワーグナー・チューバ4)、  
トランペット3、バス・トランペット1、トロンボーン3、  
コントラバス・トロンボーン1、チューバ1、ティンパニ2、  
ドンナーマシーン、ハーブ2、弦5部。

《神々のたそがれ》フルート4(ピッコロ1) オーボエ3、  
コール・アングレ1、クラリネット3、バス・クラリネット1、  
ファゴット3、ホルン8(ワーグナー・チューバ4)、  
トランペット3、バス・トランペット1、トロンボーン3、  
コントラバス・トロンボーン1、チューバ1、ティンパニ2、  
グロッケンシュビール、トライアングル、シンバル、  
ハーブ2、弦5部。

## C PROGRAM

# ワグナー ニーベルングの指環（抜粋）

## 歌手紹介

岸 浩

スーザン・オーウェン  
(ソプラノ / ブリュンヒルデ)



アメリカ生まれ。1990年のメトロポリタン・オペラ・コンクール、91年のオペラ・アメリカ・コンクール優勝者。

アメリカで音楽教育、オペラの基礎修行を終え、92年にベルリン州立オペラの ニーベルングの指環 のヘルムヴィーゲでヨーロッパ・デビュー。96年にはメルクル指揮《さまよえるオランダ人》でゼンタを歌う。ゼンタは、カッセル、デュッセルドルフ+デュースブルクのライン・ドイツ・オペラ、ポローニャ等でも歌う。

1997～99年にはカッセルの新制作 指環 でブリュンヒルデを歌い、ブリュンヒルデはその後、ボン、トリエステで歌い、2003、04年にはリエージュのワロン王室オペラ新制作 <sup>リンダ</sup>指環 に登場する。

2001年にはベルリン・ドイツ・オペラで、コウト、ティーレマン指揮でそれぞれ《トリスタンとイゾルデ》のイゾルデを歌い、ほかにライン・ドイツ・オペラ、ダルムシュタット等でも歌っている。また02年にはダルムシュタットで《ローエングリン》のオル

トルート、アメリカ・フロリダのパーム・ビーチ・オペラで《タンホイザー》のヴェーヌス、エリザベートの2役を歌っている。

このほかR.シュトラウスでの成功も忘れられない。《エレクトラ》のタイトル役に加え、2001年にはドレスデンのザクセン州立オペラに《影のない女》の染物屋の妻でデビューし大成功している。今回が日本デビューとなる。

CDは《ジークフリート》、《神々のたそがれ》で、クリスティアン・フランツ(ジークフリート)を相手にブリュンヒルデを歌っている(独Arsレーベル)

アルフォンス・エーベルツ  
(テノール / ジークフリート)



ドイツ生まれ。ボン大学で数学、経済学を学んだあと、ケルン音大に進み声楽を学ぶ。1983～85年ヴェルツブルク、85～86年ゲルゼンキルヘン、86～96年ライン・ドイツ・オペラ、97年以降ボン市立劇場専属歌手として着々とキャリアを積み上げている。またウィーン国立オペラ、ベルリン・ドイツ・オペラ、ベルリン州立オペラ、ハ

ンブルク、シュトゥットガルト、ハノーファー、ブリュッセル、ベルン、マドリッド、ローマ、トリエステ、イスタンブール、エジンバラ、モスクワ等へ客演している。

持ち役は《オランダ人》のエリック、《マイスタージンガー》のワルター、《ローエングリン》のタイトル役、指環のローゲ、ジークムント、ジークフリート、《トリスタンとイゾルデ》のトリスタン等のワーグナー作品、ほかに《魔弾の射手》のマックス、《ナクソス島のアリアドネ》のバッカス、《フィデリオ》のフロレスタン、《ヴォツェック》の鼓手、ダルベール《低地地方》のペドロ等がこれまで成功した重要な役といえる。現在新制作中のドレスデンの指環では《ジークフリート》のタイトル役を歌う。

著名演出家、指揮者との共同作業も多く、ジャン・ピエール・ボネル、アウグスト・エファージング、ウィリー・デッカー、ギユンター・クレマー、クルト・ホレス、ディーター・ドルン等、またファビオ・ルイーヂ、クリスティアン・ティーマン、ペーター・シュナイダー、ハンス・ドレヴァンツ、ハンス・ワラット等の名を挙げられる。今回が日本デビューとなる。

## フルーデ・ウルゼン

(バス・バリトン / ヴォータン)



ノルウェー生まれ。オスロで音楽教育を終えたあと、ライン・ドイツ・オペラ研修生。1986～92年バーデン州立劇場専属歌手。その後はベルリン・ドイツ・オペラ、ハンブルク州立オペラなど、ドイツを中心にヨーロッパ全域、アメリカへと活動の場を広げている。夏のザルツブルク、グラインドボーン等のフェスティヴァルにも出演している。

レパートリーはモーツァルトからメシアン、リゲティ、ベリオまで多岐にわたる。ワーグナーでは《マイスタージンガー》のボーグナー、ザックス、《トリスタン》のマルケ、《オランダ人》のタイトル役、《タンホイザー》のラントグラーフ、《パルジファル》のグルネマンツ、ニーベルングの指環では91年のモネ劇場でのファゾルトから、フランクフルトのフンディング、ボンのヴォータン、さすらい人と役柄を発展させてきた。

特筆すべきなのは、メシアンの超大作《アッシジの聖フランチェスコ》のこれまでに上演された5つの演出のうち、2つでタイトル役を歌っていることだ。

共同作業した演出家、指揮者としては、ウェルニケ、ムスパッハ、セラーズ、デッカー等、またコウトのほか、アッパード、ナガノ、パッパーノ、サロネン、カンブルラン、メッツマッハー、テイト、A.デーヴィス等の名が上げられる。

CDはR.シュトラウス《サロメ》(ドホナーニ指揮。英デッカ)、リゲティ《死神の男》(ソニー・クラシカル)等がある。

日本は98年のコウト指揮N響《第9》がデビューで、今回が2回目。前回、《第9》の前に演奏された《タンホイザー》で、ワーグナー歌手の実力を垣間見せていた。

ワーグナー 「ニーベルングの指環（抜粋）歌詞対訳  
Wagner “Der Ring des Nibelungen” (excerpts)

対訳：日本ワーグナー協会編  
Translation: Wagner Society Japan

「ワルキューレ」より

さあ、馬に鞍を置け、天翔ける戦乙女よ！

**WOTAN**

Nun zäume dein Roß,  
reisige Maid!  
Bald entbrennt  
brünstiger Streit:  
Brünnhilde stürme zum Kampf,  
dem Walsung kiese sie Sieg!  
Hunding wähle sich,  
wem er gehört;  
nach Walhall taugt er mir nicht.  
Drum rüstig und rasch  
reite zur Wal!

ヴォータン

さあ、馬に鞍を置け、  
天翔ける戦乙女よ！  
いまに戦の  
火の手が上がるぞ。  
ただちに戦場へ馳せつけて  
ヴェルゼの子に勝利をもたらせ！  
フンディングは勝手に  
後ろ楯を選ぶがよい、  
あの男はヴァルハルには似つかわしくない。  
心得たか、いざまっしぐら、  
戦の庭へと馬を駆れ！

**BRÜNNHILDE**

Hojotoho! Hojotoho!  
Heiaha! Heiaha!  
Hojotoho! Hojotoho!  
Heiaha! Heiaha!  
Hojotoho! Hojotoho!  
Hojotoho! Hojotoho!  
Heiahaha! Hojotoho!

ブリュンヒルデ

ホヨトホー！ ホヨトホー！

Dir rat' ich, Vater,  
rüste dich selbst;

お父さまこそ  
気をつけて、

harten Sturm  
sollst du besteh'n.  
Fricka naht, deine Frau,  
im Wagen mit dem Widdergespann.  
Hei, wie die gold'ne  
Geißel sie schwingt!  
Die armen Tiere  
ächzen vor Angst;  
wild rasseln die Räder;  
zornig fährt sie zum Zank!  
In solchem Strauße  
streit' ich nicht gern,  
lieb' ich auch mutiger  
Männer Schlacht;  
drum sieh', wie den Sturm du bestehst:  
ich Lustige lass' dich im Stich!

ひと荒れくるわよ、  
しっかり兜の緒をしめて！  
牡羊の牽く車に乗って  
フリッカさまがお出ましょ。  
まあ、かわいそう、  
あの方、金の鞭を振りまわすものだから  
羊たちが怯えて  
喘ぐこと！  
車輪をがらがら軋ませながら、  
すごい見幕で乗り込んでくる。  
胸のすくような男たちの戦いなら  
望むところだけれど  
この手の喧嘩は  
苦手だわ。  
この場はひとりで切り抜けてね、  
助太刀などは真っ平御免！

Hojotoho! Hojotoho!  
Heiaha! Heiaha!  
Hojotoho! Hojotoho!  
Heiaha! Heiaha!  
Hojotoho! Hojotoho!  
Hojotoho! Hojotoho!  
Heiahaha!

ホヨトホー！ ホヨトホー！

今生の別れだ、あっぱれな戦乙女!(ヴォータンの告别)

**WOTAN**  
Leb' wohl, du kühnes,  
herrliches Kind!  
Du meines Herzens heiligster Stolz!  
Leb' wohl! Leb' wohl! Leb' wohl!

ヴォータン  
今生の別れだ、  
あっぱれな戦乙女！  
わが胸の無上の誇りよ！  
さらばだ！ 娘よ、これを限りに！

Muß ich dich meiden

もはや、お前に会うことはない、

und darf nicht minnig  
mein Gruß dich mehr grüßen;  
sollst du nun nicht mehr  
neben mir reiten,  
noch Met beim Mahl mir reichen;  
muß ich verlieren  
dich, die ich liebe,  
du lachende Lust meines Auges:  
ein bräutliches Feuer  
soll dir nun brennen  
wie nie einer Braut es gebrannt!  
Flammende Glut  
umglühe den Fels;  
mit zehrenden Schrecken  
scheuch' es den Zagen;  
der Feige fliehe  
Brünnhildes Fels!  
Denn einer nur freie die Braut,  
der freier als ich, der Gott!

Der Augen leuchtendes Paar,  
das oft ich lächelnd gekost,  
wenn Kampfeslust  
ein Kuß dir lohnte,  
wenn kindisch lallend  
der Helden Lob  
von holden Lippen dir floß;  
dieser Augen strahlendes Paar,  
das oft im Sturm mir gegläntzt,  
wenn Hoffnungssehnen  
das Herz mir sengte,  
nach Weltenwonne  
mein Wunsch verlangte  
aus wild webendem Bangen:  
zum letztenmal

親しみをこめて  
かたみに挨拶を交わすこともない。  
お前が私と轡を並べ  
馬を駆ることはない、  
宴で私に蜜酒を注ぐこともない。  
この目の悦びであった  
愛しいお前を  
失わねばならぬ。  
ならば男を迎える祝儀に  
どんな花嫁も包んだことのない  
盛大な炎を燃やそう。  
かがよ耀う火が  
岩山のまわりを取り囲む。  
火勢も激しく  
腰抜けどもを追い払う。  
臆病者はブリュンヒルデの  
岩山に近づけぬ。  
娘に妻問うのは  
父たる神よりも自由な男！

輝きたつ双の眼を<sup>まなこ</sup>  
幾度となく愛でたものだ  
お前の戦いぶりをねぎらって  
くちづけを与えたときも、  
可愛いくちびるが嬉しそうに  
あどけない声で  
兵たちを称えたときも。  
燦きたつ双の眼は  
嵐のさなかでも私に向かって輝いていた  
熱い願いに  
この胸がうずいて  
切ない想いに身を灼きながら  
うつつよ現世の歡びを  
追い求めたときも。  
双の眼よ、

letz' es mich heut'  
mit des Lebewohles  
letztem Kuß!  
Dem glücklicher'n Manne  
glänze sein Stern:  
dem unseligen Ew'gen  
muß es scheidend sich schließen.

Denn so kehrt  
der Gott sich dir ab,  
so küßt er die Gottheit von dir!

Loge, hör'!  
Lausche hieher!  
Wie zuerst ich dich fand,  
als feurige Glut,  
wie dann einst du mir schwandest  
als schweifende Lohe;  
wie ich dich band,  
bann' ich dich heut'!  
Herauf, wabernde Lohe,  
umlod're mir feurig den Fels!

Loge! Loge! Hieher!

Wer meines Speeres  
Spitze fürchtet,  
durchschreite das Feuer nie!

今生の別れに、もういちど  
私の願いをかなえておくれ、  
これが最後のくちづけだ。  
瞳の星は私よりも  
幸多き男に輝くがよい。  
幸薄き神は  
別れにあたって、その眼を閉ざそう。

こうして神は  
娘と別れる、  
くちづけをもて、お前の神性を奪うのだ!

ローゲ、いいか、  
よっく聞け!  
初めて会ったとき、  
お前は燃える炎だった。  
姿をくramしたときも  
さまよう火玉に身を変えた。  
かつてお前を従えたように  
今度もお前を封じ込めてやる。  
燃え立て、ゆらめく火焰よ、  
岩山を包んで、燃え熾れ!

ローゲ! ローゲ! いざ来れ!

この穂先を  
恐れる者は  
炎の輪を越えるべからず!

## 「ジークフリート」より

あいつが父親でないことが分かってほんとにせいせいしたな！

### SIEGFRIED

Daß der mein Vater nicht ist,  
wie fühl' ich mich drob so froh!  
Nun erst gefällt mir  
der frische Wald;  
nun erst lacht mir  
der lustige Tag,  
da der Garstige von mir schied,  
und ich gar nicht ihn wiederseh'!

Wie sah mein Vater wohl aus? —  
Ha, gewiß, wie ich selbst!  
Denn wär' wo von Mime ein Sohn,  
müßt' er nicht ganz  
Mime gleichen?  
G'rade so garstig,  
griesig und grau,  
klein und krumm,  
höck'rig und hinkend,  
mit hängenden Ohren,  
triefigen Augen...  
Fort mit dem Alb! —  
Ich mag ihn nicht mehr seh'n!

Aber — wie sah  
meine Mutter wohl aus? —  
Das — kann ich  
nun gar nicht mir denken! —  
Der Rehhindin gleich  
glänzten gewiß  
ihr hell schimmernde Augen,  
nur noch viel schöner! —

### ジークフリート

あいつが父親でないことが分かって  
ほんとにせいせいしたな！  
森だって、これまでになく  
すがすがしく感じられるし、  
日の光もひとしお輝きを増して  
この俺に笑いかけてくるようだ、  
これも胸がそが悪くなるようなあいつと  
きれいさっぱり、縁を切ったおかげだ！

それにしても俺の父親はどんなだったろう？  
そうよ、俺に似ているにきまっている！  
だってミーメに男の子がいたら  
ミーメと  
瓜二つだろうじゃないか？  
やつとおなじように汚くて  
見ばのよくない陰気な野郎、  
ちっぽけな  
体の不自由な男  
耳はだらりと垂れさがり、  
目は爛れ目で  
おお、いやだ、いやだ、  
あいつなんか二度と見たくないや！

だけど 俺の母親は  
どんなだったんだろう？  
こればかりは どう考えても  
さっぱり見当がつかないや！  
きっと牡鹿みたいに  
明るい眸が  
きらきら輝いていただろうな、  
ただ牡鹿なんかよりずっときれいで

Da bang sie mich geboren,  
warum aber starb sie da?  
Sterben die Menschenmütter  
an ihren Söhnen  
alle dahin? —  
Traurig wäre das, traun!  
Ach! möcht' ich Sohn  
meine Mutter sehen! —  
Meine Mutter —  
ein Menschenweib!

Du holdes Vöglein!  
dich hört' ich noch nie:  
bist du im Wald hier daheim?  
Verstünd' ich sein süßes Stammeln!  
Gewiß sagt' es mir 'was, —  
vielleicht von der lieben Mutter?  
Ein zankender Zwerg  
hat mir erzählt,  
der Vöglein Stammeln  
gut zu versteh'n,  
dazu könnte man kommen.  
Wie das wohl möglich wär'? —

Hei, ich versuch's,  
sing' ihm nach:  
auf dem Rohr tön' ich ihm ähnlich!  
Entrat' ich der Worte,  
achte der Weise,  
sing' ich so seine Sprache,  
versteh' ich wohl auch, was es spricht.

だけど俺をやっとの思いで産みながら  
どうしてそのとき死んだのだろう?  
男の子を産むと  
人間の母親は  
みんな死ぬものなのか  
だとすればまったく悲しい話だな!  
俺は息子なんだからさ  
せめてひと目、母親に会ってみたいよ!  
俺の母親  
人間の女に!

小鳥くん!  
これまできみの歌は耳にしたことがないが  
この森に棲みついているのかい?  
舌たらずの歌でも  
きっと俺に向かって何か言っているんだろうな、  
ひょっとすると母さんのことかも知れない。  
がみがみ屋のミーメが  
まえに話していたっけ、  
小鳥の言葉だって  
工夫しないで  
何を言っているか分かるようになると。  
どうやったら、そんなふうになれるのかな、

そうだ、やってみよう、  
小鳥の真似をして  
箏笛で似たような調べを吹いてみよう!  
言葉を使えないから  
調べに気をつけて  
小鳥のおしゃべりの調子を出せば  
向こうの言っていることも分かるようになるかも  
知れない。

起きろ、ヴァーラ

**WANDERER**

Wache, Wala!  
Wala! Erwach'!  
Aus langem Schlaf  
weck' ich dich Schlummernde auf.  
Ich rufe dich auf:  
herauf! herauf!  
Aus nebliger Gruft,  
aus nächtigem Grunde herauf!  
Erda! Erda!  
Ewiges Weib!  
Aus heimischer Tiefe  
tauche zur Höh'!  
Dein Wecklied sing' ich,  
daß du erwachest;  
aus sinnendem Schlafe  
weck' ich dich auf!  
Allwissende!  
Urweltweise!  
Erda! Erda!  
Ewiges Weib!  
Wache, erwache,  
du Wala! Erwache!

わたしは永劫の時を生きてきた

**BRÜNNHILDE**

Ewig war ich,  
ewig bin ich,  
ewig in süß  
sehrender Wonne —  
doch ewig zu deinem Heil! —

さすらい人  
起きろ、ヴァーラ、  
ヴァーラ、目ざめるがよい!  
お前は久しくまどろんでいたが  
お前の眠りを覚ますためにやって来た。  
わたしの声を聞くがよい!  
上がって来い!  
濛気あなぐらのこめる響、  
ほの暗い地の底から上がって来い!  
エルダ、エルダ、  
永劫の時を生きる女よ!  
棲みついた地の底の奥どから  
大地の表に出て来るがよい!  
わたしが歌うのは  
お前の眠りを覚ます目ざましの歌、  
物思いにふける眠りから  
目ざめるがよい!  
万物に通じた  
劫初の巫女よ!  
エルダ、エルダ、  
久遠の女よ!  
目ざめるのだ、  
さあヴァーラ、目を覚ますのだ!

ブリュンヒルデ

わたしは  
永劫の時を生きてきた、  
永劫の時の中で  
甘美なあこがれの歡びにひたりながら  
いつもあなたの身の栄えばかり念じてきました!

O Siegfried! Herrlicher!  
Hort der Welt!  
Leben der Erde!  
Lachender Held!  
Laß, ach laß,  
lasse von mir!  
Nahe mir nicht  
mit der wütenden Nähe!  
Zwinge mich nicht  
mit dem brechenden Zwang,  
zertrümm're die Traute dir nicht!  
Sahst du dein Bild  
im klaren Bach?  
Hat es dich Frohen erfreut?  
Rührtest zur Woge  
das Wasser du auf,  
zerflösse die klare  
Fläche des Bachs: —  
dein Bild sah'st du nicht mehr,  
nur der Welle schwankend Gewog'!  
So berühre mich nicht,  
trübe mich nicht!  
Ewig licht  
lachst du selig dann  
aus mir dir entgegen,  
froh und heiter, ein Held!  
O Siegfried!  
Leuchtender Sproß!  
Liebe dich,  
und lasse von mir:  
vernichte dein Eigen nicht!

## SIEGFRIED

Dich — lieb' ich:  
o liebtest mich du!

おおジークフリート、世にたぐいなきひと!  
この世の宝、  
この地上に  
生命と光明をもたらす英雄よ!  
お願いだから  
わたしをそっとしておいて!  
そんなに猛り立って  
この身に迫り  
無理無体に責め立てると  
あなたの大切な女の五体が碎けてしまいます。  
後生だから、もっとやさしく扱って!  
あなた、澄んだ小川に  
自分の姿を映して見たことがある?  
あれば、われながら心楽しい思いがしたでしょう?  
だけど水をかき回して  
波を立てると、  
小川の澄んだ水鏡が  
かき乱され、  
自分の姿はかき消えて  
見えるのは、ゆらゆら波立つ水面ばかり。  
だからわたしに触らないで!  
わたしをかき乱すのはやめて!  
わたしが澄んでいれば  
わたしという水鏡は  
あなたの永遠に曇りのない  
晴れやかな勇姿を映し出すことができるのよ!  
おおジークフリート!  
光り輝く若子よ!  
わが身を大切に思うなら  
わたしに手を触れて  
わが身同然のものを台なしにしないで!

## ジークフリート

この身はあなたを愛している、  
だからあなたに愛されたい!

Nicht hab' ich mehr mich:  
o, hätte ich dich! —  
Ein herrlich Gewässer  
wogt vor mir:  
mit allen Sinnen  
seh' ich nur sie,  
die wonnig wogende Welle.  
Brach sie mein Bild,  
so brenn' ich nun selbst,  
sengende Glut  
in der Flut zu kühlen;  
ich selbst, wie ich bin,  
spring' in den Bach:  
o, daß seine Wogen  
mich selig verschlängen,  
mein Sehnen schwänd' in der Flut!  
Erwache, Brünnhilde!  
Wache, du Maid!  
Lache und lebe,  
süßeste Lust!  
Sei mein! Sei mein! Sei mein!

### BRÜNNHILDE

O Siegfried! Dein —  
war ich von je!

### SIEGFRIED

Warst du's von je,  
So sei es jetzt!

### BRÜNNHILDE

Dein werd' ich  
ewig sein!

### SIEGFRIED

この身にはもう自分というものがない、  
だからあなたが欲しい!  
心をそそる流れが  
目のあたりに波打っている。  
俺は全身を目にして  
楽しく波打つ  
流れだけを見ている。  
水鏡に映る姿が乱れるなら  
俺じしんが燃え立って  
この身を焦がす熱を  
流れにひたしてさませばよい、  
俺じしんが身ひとつになって  
小川に飛び込む、  
すると小川が波立って  
この身をやさしく包み込み、  
身を灼くあこがれも流れに吞まれて消えていく。  
だから、ブリュンヒルデ!  
乙女の夢から目ざめて  
笑って生きるのだ!  
こよなく甘美なわが喜びよ!  
目ざめて、俺のものになってくれ!

### ブリュンヒルデ

おお、ジークフリート、わたしは  
ずっと前からあなたのものだったのよ!

### ジークフリート

昔からそうだったのなら  
いま、なっておくれ!

### ブリュンヒルデ

わたしはこれからもずっと  
あなたのものよ!

### ジークフリート

Was du sein wirst,  
sei es mir heut'!  
Faßt dich mein Arm,  
umschling' ich dich fest;  
schlägt meine Brust  
brünstig die deine;  
zünden die Blicke,  
zehren die Atem sich;  
Aug' in Auge,  
Mund an Mund:  
dann bist du mir,  
was bang du mir warst und wirst!  
Dann brach sich die brennende Sorge,  
ob jetzt Brünnhilde mein?

### BRÜNNHILDE

Ob jetzt ich dein? —  
Göttliche Ruhe  
rast mir in Wogen;  
keuschestes Licht  
lodert in Gluten:  
himmlisches Wissen  
stürmt mir dahin,  
Jauchzen der Liebe  
jagt es davon!  
Ob jetzt ich dein?  
Siegfried! Siegfried!  
Siehst du mich nicht?  
Wie mein Blick dich verzehrt,  
erblindest du nicht?  
Wie mein Arm dich preßt, —  
entbrennst du mir nicht?  
Wie in Strömen mein Blut  
entgegen dir stürmt,  
das wilde Feuer,

これからもずっとそうなら  
今日、ここでなっておくれ!  
この腕にあなたを抱き  
固く抱きしめれば  
この胸の高鳴りが  
あなたの胸を打ち、  
見つめ合う瞳に火がついて  
たがいの息吹きがまじり合う。  
目を見交わして  
口と口とを重ねれば  
遠い過去や未来はいざ知らず  
ここにいるあなたはこの俺のもの!  
いまブリュンヒルデは俺のものかと  
とつおいつ思案することもなくなったのだ。

ブリュンヒルデ  
いま、わたしがあなたのもの?  
神にもまがう安らぎが  
いまでは大波を打って荒れ狂い、  
汚れを知らぬ清らかな光が  
いま、えんえんと燃え上がっている。  
天上の知恵は  
愛の歓声に  
駆り立てられて  
どこかに消し飛びました!  
いま、わたしがあなたのもの?  
ジークフリート、ジークフリート、  
あなたにはわたしが見えないの?  
こんなに貪るように見つめられたら  
目が眩みはしない?  
こんなに強く腕かみに抱きしめられたら  
身うちがかっかかと燃えてこない?  
わたしの血潮はあなたを欲しがって  
奔流のように体内を駆けめぐっている、  
その烈火の火照りを

fühlst du es nicht?  
Fürchtest du, Siegfried,  
fürchtest du nicht  
das wild wütende Weib?

### SIEGFRIED

Ha!  
Wie des Blutes Ströme sich zünden,  
wie der Blicke Strahlen sich zehren;  
wie die Arme brünstig sich pressen, —  
kehrt mir zurück  
mein kühner Mut,  
und das Fürchten, ach!  
das ich nie gelernt, —  
das Fürchten, das du  
mich kaum gelehrt: —  
das Fürchten, — mich dünkt, —  
ich Dummer vergaß es nun ganz!

### BRÜNNHILDE

O kindischer Held!  
O herrlicher Knabe!  
Du hehrster Taten  
töriger Hort!  
Lachend muß ich dich lieben,  
lachend will ich erblinden,  
lachend laß uns verderben, —  
lachend zugrunde geh'n!  
Fahr' hin, Walhalls  
leuchtende Welt!  
Zerfall' in Staub  
deine stolze Burg!  
Leb' wohl, prangende  
Götterpracht!  
End' in Wonne,

あなたは感じないの?  
ジークフリート、こわくないの?  
この物ぐるわしく猛り立つ女が  
あなた、こわくないの?

ジークフリート  
なんという喜び!  
ふたりの血潮に火がついて  
たがいに眼差しを貪り合い  
腕と腕とを激しく絡み合わせているうちに  
こわいもの知らずの勇気が  
またこの身に戻ってきた。  
俺はこれまで  
身に覚えたことのない怖れを  
あなたから教わった。  
しかし教わったばかりの  
その怖れを 物覚えが悪いせいか  
すっかり忘れてしまったらしい!

ブリュンヒルデ  
まあ、子供みたい!  
すてきな坊や!  
あんなに勇ましい手柄を立てながら  
けろりと忘れていたのね!  
笑いながらあなたを愛さずにはいられない、  
笑いながら恋に<sup>めし</sup>盲いて  
笑いながら手を携えて滅びの道をたどり  
笑いながらこの世から姿を消しましょう!  
さらば、ヴァルハルの  
光輝にみちた世界よ!  
聳え立つその城も  
微塵となって碎けるがよい!  
さらば、栄華を誇る  
神々の栄光よ!  
神々の一族も

du ewig Geschlecht!  
Zerreißt, ihr Nornen,  
das Runenseil!  
Götterdämm' rung,  
dunk'le herauf!  
Nacht der Vernichtung,  
neb'le herein!  
Mir strahlt zur Stunde  
Siegfriedes Stern:  
er ist mir ewig,  
ist mir immer,  
Erb' und Eigen,  
Ein und All':  
leuchtende Liebe,  
lachender Tod!  
**SIEGFRIED** (mit Brünnhilde zugleich)  
Lachend erwachst  
du Wonnige mir:  
Brünnhilde lebt,  
Brünnhilde lacht!  
Heil dem Tage,  
der uns umleuchtet!  
Heil der Sonne,  
die uns bescheint!  
Heil dem Licht,  
das der Nacht enttaucht!  
Heil der Welt,  
der Brünnhilde lebt!  
Sie wacht, sie lebt,  
sie lacht mir entgegen!  
Prangend strahlt  
mir Brünnhildes Stern!  
Sie ist mir ewig,  
ist mir immer,  
Erb' und Eigen,

歓びのうちに滅びるがいい!  
ノルンたち、  
運命の綱を断ち切ってちょうだい!  
神々の黄昏が  
世界に垂れこめ  
狭霧きぎりの立ちこめる  
滅亡の夜が訪れればいいのよ!  
いまのわたしにとっては  
ジークフリートが希望の星、  
彼こそは永遠に  
この身の  
かけがえのない宝、  
唯一であってすべて、  
彼と一緒に輝かしい愛に生き  
欣然と死を迎えることができる!  
ジークフリート(ブリュンヒルデと声を合わせて)  
いとしいひとが  
笑いながら眠りから覚めた。  
ブリュンヒルデが生き  
ブリュンヒルデが笑っている!  
ふたりを包んで輝く  
白日の世界に祝福あれ!  
ふたりを照らし出す  
太陽に祝福あれ!  
夜闇から生まれた  
光に祝福あれ!  
ブリュンヒルデの甦った  
この世に祝福あれ!  
彼女が眠りから覚めて生き  
この身に笑いかけている!  
ブリュンヒルデの星が  
いま燦然と輝いている!  
彼女こそは永遠に  
この身の  
かけがえのない宝、

Ein und All':  
leuchtende Liebe,  
lachender Tod!

**BEIDE**

Leuchtende Liebe,  
lachender Tod:  
leuchtende Liebe,  
lachender Tod!

唯一であってすべて、  
彼女と一緒に輝かしい愛に生き  
欣然と死を迎えることができる！

兩人  
相擁して輝かしい愛に生き  
欣んで死を迎えよう、  
もろともに輝かしい愛に生き  
欣んで死を迎えよう！

「神々のたそがれ」より  
ブリュンヒルデ！ 聖なる花嫁よ！

**SIEGFRIED**

Brünnhilde!  
Heilige Braut!  
Wach' auf! Öffne dein Auge!  
Wer verschloß dich  
wieder in Schlaf?  
Wer band dich in Schlummer so bang?  
Der Wecker kam:  
er küßt dich wach, —  
und aber — der Braut  
bricht er die Bande: —  
da lacht ihm Brünnhildes Lust! —  
Ach! Dieses Auge,  
ewig nun offen!  
Ach, dieses Atems  
wonniges Wehen!  
Süßes Vergehen —  
seliges Grauen:  
Brünnhild' — bietet mir — Gruß!

ジークフリート  
ブリュンヒルデ！  
聖なる花嫁よ！  
目覚めよ！ 眼を開け！  
お前をもとの眠りに  
封じ込めたのは誰か？  
眠りの枷をはめ、不安に陥れたのは誰か？  
その眠りを覚ます男が現われ、  
口づけして、お前の眼を開く  
そして 男が花嫁を  
枷から解き放つときこそ、  
ブリュンヒルデは喜色に溢れて微笑みかけてくる！  
ああ、その眼、  
いまや永遠に見開かれた！  
ああ、かぐわしい  
その吐息！  
この身の消えゆく  
至福のおののき！  
ブリュンヒルデの祝福を 一身に受けて！

太い薪をラインの河縁に幾重にも積み上げよ！

**BRÜNNHILDE** (*zu den Mannen*)

Starke Scheite  
schichtet mir dort  
am Rande des Rheins zu Hauf!  
Hoch und hell  
lod're die Glut,  
die den edlen Leib  
des hehresten Helden verzehrt.  
Sein Roß führet daher,  
daß mit mir dem Recken es folge :  
denn des Helden heiligste  
Ehre zu teilen,  
verlangt mein eig'ner Leib.  
Vollbringt Brünnhildes Wort!

Wie Sonne lauter  
strahlt mir sein Licht:  
der Reinste war er,  
der mich verriet!  
Die Gattin trügend —  
treu dem Freunde —  
von der eig'nen Trauten —  
einzig ihm teuer —  
schied er sich durch sein Schwert.  
Echter als er  
schwur keiner Eide;  
treuer als er  
hielt keiner Verträge;  
laut'rer als er  
liebte kein and'rer !  
Und doch, alle Eide,  
alle Verträge,  
die treueste Liebe —

ブリュンヒルデ (家来たちに)

太い薪を  
ラインの河縁に  
幾重にも積み上げよ！  
炎よ、高く、あかあかと  
燃え上がれ！  
世に類ない勇士の  
貴い亡骸を焼き尽くすために。  
あの人の愛馬を曳いてきなさい、  
私とともにあの人の後を追うために。  
無上の榮譽を  
英雄と分かち合うことを  
この肉ししむらは求めている。  
ブリュンヒルデの望みをかなえてください！

あの人は太陽のごとく  
煌々と照り輝いている。  
至純の人でありながら  
私を裏切った。  
妻を欺きながら  
友には誠を尽くし、  
おのれの剣によって  
かけがえのない女から  
わが身を隔てた。  
あの人ほどに純真に  
誓いを立てた人はなく、  
あの人ほどまめやかに  
契りを守った人はいない。  
あの人のように一本気に  
愛した人もいなかった。  
だが、すべての誓い、  
すべての契り、  
至上の愛の誠まで

trog keiner wie er! —  
Wißt ihr, wie das ward?  
*(nach oben blickend)*  
O, ihr, der Eide  
heilige Hüter!  
Lenkt euren Blick  
auf mein blühendes Leid;  
erschaut eure ewige Schuld!  
Meine Klage hör',  
du hehrster Gott!  
Durch seine tapferste Tat,  
dir so tauglich erwünscht, —  
weihtest du den,  
der sie gewirkt,  
dem Fluche, dem du verfielst;  
mich mußte  
der Reinste verraten,  
daß wissend würde ein Weib!  
Weiß ich nun, was dir frommt?  
Alles, alles,  
alles weiß ich, —  
Alles ward mir nun frei.  
Auch deine Raben  
hör' ich rauschen;  
mit bang' ersehnter Botschaft  
send' ich die beiden nun heim.  
Ruhe, ruhe, du Gott!

Mein Erbe nun  
nehm' ich zu eigen. —  
Verfluchter Reif!  
Furchtbarer Ring!  
Dein Gold fass' ich,  
und geb' es nun fort.  
Der Wassertiefe

あの人ほど平然と裏切った人もいない。  
なぜこんなことになったのか、お分かりですか?  
*(天空を見上げて)*  
ああ、すべての契約の保護者たる  
天上の神々よ、  
この塗炭の苦しみに  
眼差しを注ぎ、  
あなたたちの永劫の料とがを見て取るがいい!  
私の告発を聞きなさい、  
神々の長ヴォータンよ!  
彼に望みをかけた  
余人の為しあたわぬ勲いほおしだったのに、  
それを果たした勇士は  
あなたに降りかかった呪いを  
われとわが身にかぶってしまった。  
あの純粹無垢な人は  
私を裏切るはめになり、  
それによって、この女も悟りを開いたのです。  
さて、何があなたの身のためになるのかしら。  
すべて、すべてを  
私は知った、  
すべてが私の目には明らかになった。  
あなたの鴉たちの羽ばたきも  
私は耳にしました。  
いまや、あなたが不安のうちに待ち望む  
報せをもたせて、鴉たちを送り返しましょう  
憩え、安らげ、神よ!

この宝は  
私が継ぐべきもの。  
呪われた指環よ、  
恐ろしい指環よ、  
この黄金をわが物とするのも、  
それを手放すため。  
水底の

weise Schwestern,  
des Rheines schwimmende Töchter,  
euch dank' ich redlichen Rat.  
Was ihr begehrt,  
ich geb' es euch:  
aus meiner Asche  
nehmt es zu eigen!  
Das Feuer, das mich verbrennt,  
rein'ge vom Fluche den Ring!  
Ihr in der Flut,  
löset ihn auf,  
und lauter bewahrt  
das lichte Gold,  
das euch zum Unheil geraubt!

Fliegt heim, ihr Raben!  
Raunt es eurem Herren,  
was hier am Rhein ihr gehört!  
An Brünnhildes Felsen  
fährt vorbei!  
Der dort noch lodert,  
weist Loge nach Walhall!  
Denn der Götter Ende  
dämmert nun auf.  
So — werf' ich den Brand  
in Walhalls prangende Burg.

Grane, mein Roß!  
Sei mir gegrüßt!

Weißt du auch, mein Freund,  
wohin ich dich führe?  
Im Feuer leuchtend,  
liegt dort dein Herr,  
Siegfried, mein seliger Held.

賢い乙女たち、  
ラインの水の精よ、  
親切な忠告をありがとう。  
あなたたちの切望する  
宝を返してあげましょう。  
私を焼いた灰のなかから  
拾い上げるのよ！  
私を焦がす炎が  
指環の呪いを浄めてくれる！  
流れのなかで  
もとの姿に返して、  
きよらかなままに  
無垢の黄金を守るがいい、  
奪われて禍いを招いた黄金を。

鴉たち、飛んで帰り、  
主人に伝えるがいい、  
ここラインのほとりで聞いたことを。  
ブリュンヒルデの岩山を  
掠めて飛ぶがいい。  
そこで今なお炎を上げているローゲを  
ヴァルハルに向かわせなさい！  
いまや神々の黄昏が  
始まろうとしている。  
こうして　ヴァルハルの栄華を誇った城に  
炎を投じよう！

グラーネ、愛しい馬よ、  
ようこそ！

どこへ連れてゆくか、  
お前には分かっているね。  
ご主人のジークフリートは  
炎に包まれて、輝きながら  
あそこに横たわっている。

Dem Freunde zu folgen,  
wieherst du freudig?  
Lockt dich zu ihm  
die lachende Lohe?  
Fühl' meine Brust auch,  
wie sie entbrennt,  
helles Feuer  
das Herz mir erfaßt,  
ihn zu umschlingen,  
umgeschlossen von ihm,  
in mächtigster Minne  
vermählt ihm zu sein!  
Heiajaho! Grane!  
Grüß' deinen Herren!  
Siegfried! Siegfried! Sieh'!

Selig grüßt dich dein Weib!

あの人の後を追うのがうれしくて  
そんなに嘶くのかい?  
歡喜する炎が  
お前を誘うのかい?  
私の胸の鼓動を聞いて!  
この胸にも  
火がついて  
あかあかと燃え熾っているのよ。  
あの人を抱きしめ、  
あの人に抱かれる  
至上の愛のうちに、  
あの人とひとつになるのよ!  
それゆけ! グラーネ!  
お前の主人のもとへ!  
ジークフリート、ごらんなさい!

あなたの妻の祝福を受けて!

(白水社刊：ワーグナー『ヴァルキューレ』『ジークフリート』『神々の黄昏』  
日本ワーグナー協会監修：三光長治、高辻知義、三宅幸夫、山崎太郎編訳より)